

年次報告書
2018年度
事業報告書

中京大学經濟研究所

目 次

1. 経済研究所セミナー報告	1
2. 定期刊行物紹介	9
3. 2018年度決算および2019年度予算	13
4. 2019年度活動計画	14
5. 研究所研究員	15
6. スタッフ紹介	16

1. 経済研究所セミナー報告

本年度開催された特別セミナーとセミナーの内容を紹介する。

2018年度中京大学経済研究所特別セミナー

テーマ：『市場の質と現代経済』

2018年12月22日に、中京大学経済研究所・特別セミナー「市場の質と現代経済」を開催した。トップにランク国際的な査読付き学術雑誌に論文を公刊した経歴を持つ、新進気鋭の若手研究者3名をお招きし、現代市場の質にかかわる論点に関する研究報告が行われた。第一報告者の荒渡良氏（同志社大学准教授）は、政府が民間部門の生産性向上のために行う支出額が経済成長に与える影響について、近年のマクロ経済学が重要視する「経済主体の異質性」という要因を切り口に、過去の実証研究結果と統合的な理論分析を報告した。第二報告者の本領崇一氏（同志社大学准教授）は、政治家と投票者をつなぐ政治メディアや被推薦者（例えば、求職者）と被推薦者を受け入れる主体（例えば、企業）をつなぐ推薦状の書き手（例えば、大学教授）などの例を挙げ、そのような情報伝達を行う中間者のような経済主体が特定のバイアスを持っていた時に、どのような行動が均衡としてサポートされるについて、ゲーム理論に基づく分析結果を示した。第三報告者の杉田洋一氏（一橋大学経済学研究科講師）は、国内への対外直接投資を自由化することで、企業が労働者に対して持つ価格（賃金）独占力がどのように影響を受けるかについて、詳細な実証分析を提示した。以上3名の報告はいずれも現実の諸問題に強く立脚するテーマを、最新の経済分析手法によって鋭く切り込んだ、きわめて高いレベルのものであった。名古屋大学などの近隣だけではなく関東圏の大学からも参加者があり、特別セミナーを通して、報告者との活発な議論が行われた。

（経済学部教授 古川雄一）

経済研究所セミナー

第1回 2018年12月7日

柴山千里氏（小樽商科大学商学部教授）：自縄自縛か礼節か 日本のアンチ・ダンピング政策

柴山千里先生の研究報告は、日本におけるアンチ・ダンピング政策の実情を、豊富な文献、法令や個々のアンチ・ダンピング(AD)手続きを検討することで、日本のAD政策の特徴を明らかにするものであった。日本のAD措置が少ない理由は、法令が国際水準より厳格で調査期間が長く課税率が低かったせいで申請者が提訴するインセンティブが低いものであったためである。これを柴山先生は「自縄自縛」と呼んでいる。日本がWTOで規律強化を訴えている内容と整合的に政令やガイドラインは作られており、手続きに関してもWTOのパネル提訴がなされていないことから、法令遵守をしているように見える。これを柴山先生は「礼節」と呼んでいる。こうした「自縄自縛」ないし「礼節」状態を打破すべく、2004年以降は法令やガイドラインを実践に則して度々改正したことで、2008年の電解二酸化マンガン事件以降、NMEやFAの手続き手法により課税率がそれ以前に比べ急激に上昇したこと、2010年代は申請要件の緩和がなされ、潜在的申請者の提訴インセンティブは増していることが示された。報告は明快で関心を引き付けるものであったこともあり、多くの参加者により活発な議論がなされた。

（経済学部教授 近藤健児）

第2回 2018年12月10日

新井泰弘氏（高知大学教育研究部講師）：Subsidies and Self-Funding（早稲田大学の河村耕平氏との共同研究）

2012年のアメリカの例によれば研究開発にかかわる政府の補助金の1/3は大学に、1/3は企業に流れている。本当に補助金を必要としているのが誰なのかを知ることは、情報の非対称があり難しい。モニタリングや査読もコストが大き過ぎ、利害対立があって信頼できない場合がある。新井先生らの研究はこの問題を自己選択(セルフ・セレクション)の概念を用いて解決しようとするものである。大きな研究テーマとして、自己による資金調達へのコミットメントへの要求を、いかにして補助金なしには内実を伴わないような研究開発プロジェクトの自己選択を誘発することに用いるべきであるかというものがあり、新井先生は自己選択のスクリーニングによって、費用の安い研究開発をあぶりだすことができることを理論モデルで明らかにした。また、どのような場合に自己による資金調達へのコミットメントへの要求が補助金受領者自身の研究開発への意欲を刺激するのかについても精緻に分析している。最先端の理論研究だが報告は丁寧かつ明快であり、多くの参加者からの活発な質問やコメントが報告者に向けられた。

（経済学部教授 近藤健児）

第3回 2018年12月21日

古村 聖 氏 (武蔵大学経済学部教授) : "Consequences of War: Japan's Demographic Transition and the Marriage Market" (with Kota Ogasawara)

本報告は、男女比率の不均衡が、家計内のバーゲニングの結果として、子の数と質にいかなる影響を与えるかを検討したものである。第1に、家族の目的に関してカップル間でコンフリクトが存在する場合における家計内のバーゲニングのモデルを提示し、男性(女性)比率の上昇は子の数を減少(増加)させる一方で、子の質を上昇(低下)させることを示した。第2に、自然実験として第2次世界大戦を用い、以上の結果が実証的にも確認されることを示した。

(経済学部教授 釜田公良)

第4回 2019年1月21日

宇都宮浄人 氏 (関西大学経済学部教授) : オーストリアの地域公共交通～政策とその効果～

独立採算を原則とする日本の地域鉄道の運営が行き詰まりを見せる中、日本においても、国と地域の公的資金を投入して地域鉄道の再生を図る動きがみられるようになってきている。この取り組みは、まだ始まったばかりであり、地域鉄道運営のスキーム自体もさらなる検討が必要であると考えられる。オーストリアでは、日本の県と同規模の州が地域の公共交通全体を企画・運営し、連邦政府と共に地域鉄道を支援するなどの取り組みがなされており、わが国にとっても参考になる部分があると思われる。宇都宮浄人氏は一年間の在外研究期間を利用して、オーストリアの地域鉄道の現地調査を実施し、住民アンケートを通じて地域鉄道の価値をCVM(仮想市場評価法)で計測した。また、関係法制度などを整理するとともに、政府、自治体関係者へのヒアリングを行って、政策が有効に機能している理由を明らかにしている。質疑応答も含め本研究会で得られた様々な知見をもとに考えると、オーストリアと日本で地域住民が抱く鉄道の価値にはそれ程の差はなく、財源問題を含めて法制度を整え、官民が一体となって取り組むことができれば、日本においても地域鉄道の再生は可能であるとの希望が持てた。

(経済学部教授 鈴木崇児)

第5回 2019年3月12日

Marcella Scrimitore 氏 (University of Salento 准教授) : Hiring a manager or not? When asymmetric equilibria arise under outsourcing to a rival

サレント大学の Marcella Scrimitore 氏を招いて、「Hiring a Manager or Not? When Asymmetric Equilibria Arise under Outsourcing to a Rival」というタイトルで研究報告をして頂いた。通常では、互いに競争する各企業は生産過程で必要となる中間財を自前で調達することが想定される。しかし、自動車産業や半導体産業などでは、競争するライバル企業に対して中間財を供給することがよくある。この点を考慮して、本研究では「価格競争あるいは数量競争に従事する2企業のうち、1企業が他社に対して中間財を供給する」モデルを想定して、各企業が経営者を雇うかどうかについて内生化する議論をしている。この議論を通じて、「財の代替性に応じて一方の企業が経営者を雇い、もう一方の企業が雇わないという均衡が導かれうる」という既存研究とは異なる興味深い結果が得られている。

(経済学部准教授 都丸善央)

第6回 2019年3月15日

二神孝一 氏 (大阪大学経済学研究科教授) : Risk Aversion, Population Aging, and Economic Growth

大阪大学経済学研究科の二神孝一氏を招いて、「Risk Aversion, Population Aging, and Economic Growth」というタイトルで研究報告をして頂いた。「人口の高齢化が経済成長にどのような影響をあたえるのか」という問題は経済成長理論の中でも重要なリサーチクエスチョンの1つである。近年、行動経済学において高齢者は若者よりも危険回避的であるという結果が得られている。二神氏は、高齢者と若者で危険回避度に違いがあるという設定をモデルに導入することで、人口の高齢化が経済成長の重要な源泉である資本蓄積と技術進歩のための投資に与える影響を分析した。

二神氏の結果は、以下の2点にまとめられる。1点目は、若者よりも危険回避的でない高齢者が存在する経済において、人口の高齢化は資本蓄積を促進する。2点目は、若者よりも危険回避的な高齢者が存在する経済において、人口の高齢化は資本蓄積を促進しない。これらの結果や二神氏の提示したモデルは非常に興味深いものであったため、セミナーでは本学教員や他大学の研究者も含め、活発な議論が行われた。

(経済学部准教授 都丸善央)

第 7 回 2019 年 3 月 20 日

Hsing-Chun Lin 氏 (林幸君氏 台湾国立嘉義大学教授) : “The Value-Added in Trilateral Trade among Mainland China, Taiwan and the United States: A Global Value Chain Approach”

Abstract

The issue of trade imbalance between Taiwan, the U.S. and China, which are concerned by all walks of life today, is based on the results of traditional trade statistics. However, the traditional trade statistics method is “gross” statistics, which is different from the “net amount” of GDP statistics. As a result, the increase in the amount of foreign trade in a country does not necessarily mean that GDP has risen, causing an overestimation of the contribution of exports to GDP, and distorting a country’s presentation of external competitiveness.

This paper will clarify the true situation of the trade between Taiwan, the United States, and China from the perspective of the value added trade and trade in value-added. The value-added of Taiwan’s additional value is far less than the current total amount of statistical exports, among which the value of Taiwan’s value added to U.S. exports as a percentage of Taiwan’s GDP shows a declining trend and represents a decline in Taiwan’s economic dependence on the United States. On the other hand, the value of Taiwan’s value added to China as a percentage of Taiwan’s GDP is on the rise, reflecting the increasing dependence of Taiwan’s economy on China. However, Taiwan’s value added to the United States is slightly higher than that of traditional trade statistics. Taiwan has surpassed the United States. Taiwan’s value added to China is far lower than traditional Taiwan’s surpassing China. There are different trends. It is mainly Taiwan’s exports to China, many of which are assembled and processed and then exported to the United States. Finally, the United States “adsorbs” the value added created by Taiwan. As a result, Taiwan’s value added to the United States exceeds that of traditional statistics, which is an value added outperformed the traditional low.

The results indicate that Taiwan’s exports are mainly for foreign OEMs, and key original components rely on imports, resulting in a higher share of foreign acquisitions. A closer look at the source of the domestic value-added of Taiwan's exports is mainly due to the export of intermediate goods, and the proportion is increasing. On the contrary, the proportion of the final goods exports has gradually declined. Among them, the export to the United States was mainly from the final goods exports before 2004, and it was transformed to mainly intermediate goods exports after 2005. As for Taiwan’s exports to China, the proportion of exports from intermediate goods has been higher in the past 15 years. This shows that Taiwan's industry is participating in global value chain activities and moving to the upper

and middle streams. Comparison of Taiwan to the United States and Taiwan to China's VAX and DVA, Taiwan's actual value added earned from the United States is greater than the apparent the United States paid. This is because the United States has absorbed the US's bilateral trade exchanges from Taiwan and the United States. Also, VAX is larger than DVA because the value added created by Taiwan is invisible in other countries' exports to the United States, and the United States also indirectly absorbs the value added created by Taiwan through other countries. Secondly, the value added that Taiwan earns from China is less than China has apparently paid to for Taiwan. The main reason is that part of the value added that China has paid to Taiwan is passed on to other countries, and the United States is the main absorbing country. This shows that China is an important processing and transfer station for Taiwan's exports to the United States.

(経済学部教授 山田光男)

第 8 回 2019 年 3 月 20 日

Shin-Hsun Hsu 氏 (徐世勳氏 台湾国立台湾大学教授) : " A Global Value Chain Analysis of Chemicals Export in Korea, Japan, China and Taiwan"

Estimating trade in terms of value added provides a new perspective on trade patterns. The OECD-WTO Trade in Value Added (TiVA) database provides data on the origin of the value added in gross exports. This can be used to outline trade flows taking place within global value chains (GVCs). The chemicals industry is a sector dominated by supply chains. The chemicals market faces strong international competition, and companies make use of supply chains to optimize their production or services and to make cost savings. TiVA data shows that around 62 per cent of the value added in chemicals exports in 2011 (the latest year for which data is available in the TiVA database) originated from other industries supplying inputs to chemical firms to allow them to produce goods and services for export.

By the decomposition method of intermediate goods exports with the WIOD database, the empirical results indicate the value-added exports in chemicals industry accounted for only 58.4% (Japan), 51% (Korea) and 44% (Taiwan) of their gross counterparts. Decreasing trend in DVA appears in chemicals export in Japan, Korea and Taiwan, though chemicals exports of Japan, Korea and Taiwan kept growing steadily. A possible reason why they show different composition structures of the three major exporting categories is that Japan exhibited high techniques of industrial development, greatly helping to boost its value-added content from abroad. Korea chemical exports are concentrated on automobiles, shipbuilding, semiconductors, steel, and other heavy industries. Which may exhibited high

diversity of industrial development. Taiwan exports are highly concentrated on timber, clothing services, and chemical ingredients related industries. Which exhibited middle techniques of industrial development. Similar trends of growth in foreign value added and pure double-counted parts reflects increasing involvement in vertical specialization for them.

(経済学部教授 山田光男)

第9回 2017年3月25日

深井大幹 氏 (九州大学大学院工学研究院都市システム工学特任教授) : **Endogenous Repo Cycles**

九州大学大学院工学研究院の深井大幹氏を招いて、「Endogenous Repo Cycles」というタイトルで研究報告をして頂いた。本研究では「借り手が債券を担保にして現金を貸し手から借り受け、定められた期日に債券を買い戻す」という貸借契約、いわゆる、レポ取引を理論的に分析している。借り手と貸し手間の関係を無限期間ランダムマッチングモデルという極めてシンプルなモデルで捕らえる一方、「レポ取引のような担保付ローンが内生的に生じ、しかも、担保価値が内生的に循環しうる」戦略が存在するという興味深い結果を得ている。

(経済学部准教授 都丸善央)

第10回 2019年3月26日

佐藤健治 氏 (大阪府立大学准教授) : **Differentiability of the policy function in models with equilibrium growth**

2019年3月19日に、大阪府立大学准教授の佐藤健治氏をお招きして、経済研究所セミナーを行った。テーマはマクロ動学理論の根幹をなすラムゼーモデルの性質に関するもので、特に、動学的最適化の解として導出される、いわゆるポリシーファンクションの微分可能性を担保するのに必要な仮定について、詳細かつ緻密な理論分析が報告された。多くの既存研究はポリシーファンクションの微分可能性を暗に「仮定」して分析を行っているが、その仮定が、使用されている経済モデルの諸設定と整合的かどうかは、実のところ不明である。もし非整合性があれば分析結果の信頼性が失われるので、この問題は重要である。本研究報告は、この「仮定」がどのようなときに妥当なものであるかについて、あたらしい条件を証明した点において新しく、意義のあるものと言える。当日は九州大学からの参加者もあり、報告者との活発な議論が行われた。

(経済学部教授 古川雄一)

第 11 回 2019 年 3 月 26 日

Tat-kei Lai 氏 (Assistant Professor, IÉSEG School of Management, Paris) : Do Licensing restrictions Affect Canteen Price and Quality?

2019年3月19日に、IESEG School Management (パリ、フランス)准教授の Tat-kei Lai 氏をお招きして、経済研究所セミナーを行った。本報告は、香港などで散見される社内食堂の利用者に対する規制が、食堂利用者の行動や経済厚生に与える影響をみた理論研究である。特に、ランチを「需要」する経済主体を考え、社内食堂と建物外の食堂のどちらでランチをするのかについて、効用最大化に基づく内生的な意思決定を分析した。企業（レストラン）サイドは、ホテリングモデルにおける価格競争を想定し、企業はある閉区間に一様に分布しているものとする。そのうえで、区間の一つの端を社員食堂と設定した。結果は、社内食堂への規制緩和は、必ず市場を競争的にする（価格を下げる）が、企業の利潤と消費者余剰はかえって低下する可能性があることが分かった。この理論研究による結果は、香港などで実際に行われている規制に対して、1つの政策的インプリケーションを与えことが可能で、その意味において理論的にも政策的にも価値のあるものといえる。当日は九州大学や京都大学からの参加者もあり、報告者との活発な議論が行われた。

(経済学部教授 古川雄一)

2. 定期刊行物紹介

定期刊行物として、研究叢書および6本のディスカッション・ペーパーが発行された。

研究叢書

第26輯 近藤健児・寶多康弘・須賀宣仁 編著『国際貿易理論の現代的諸問題』（2019年3月）

ディスカッション・ペーパー

No.1801 Akiyoshi Furukawa : Efficient Municipal Consolidation and Local Public Spending (June 2018)

[Abstract] This paper analyzes whether municipal consolidation decreases local public spending, using the local public goods model. First, the conditions under which municipal consolidation achieves efficient allocation are shown. Second, after such efficiency is realized, the allocation is analyzed to see whether it reduces local public expenditure.

If the cost function for local public goods per capita decreases with increase in population, the efficient municipal consolidation will increase local public expenditure because the amount of local public goods provided rises. Some studies expect that local public expenditure under such a cost function would decline. However, this paper shows that one effect of municipal consolidation is to expand local public services and not to reduce local public expenditure.

JEL classification: R51, H72, R23, H73

Keywords: municipal consolidation; local public expenditure; regional population; boundary reform

Acknowledgement: I thank Mototsugu Fukushige, Naosumi Atoda, Keiko Shimono, Shinichi Kitasaka, Masaya Sakuragawa and participants in KMSG seminar for their helpful comments

No.1802 Akira Yakita : Optimal Long-Term Care Policy and Sibling Competition for Bequests (November 2018)

[Abstract] We examine the optimality of public long-term care policy, incorporating a Nash game between elderly parents and adult children and transfer-seeking competition among siblings, instead of children's altruism. Results show that when children compete to obtain more bequests from parents in exchange for attention and care, public long-term care policy is socially optimal if long-term care taxation sufficiently benefits parents through the long-term care provision, thereby reducing parental bequests to children, possibly to zero. If taxation insufficiently benefits parents, then formal long-term care policy might not be necessary because parents receive adequate informal care in exchange for bequests to children.

Keywords: bequests, exchange model of intergenerational transfers, long-term care insurance, transfer-seeking children

JEL Classification: D15, H20, H50

No.1803 Tohru Naito and Tatsuya Omori : Optimal Policy for Social and National Security (December 2018)

[Abstract] In this study, we discuss the optimal policy when the government controls both tax to finance social and national security and allocation of public funds between them, by introducing national risk into our model. We present the optimal tax and optimal allocation rates when the probability of national risk is equal to or more than 50% and the interest factor is more than the population growth rate. As both optimal rates depend on the probability of national risk, we reveal that a higher probability increases the optimal tax rate and decreases the optimal allocation rate from national to social security.

Key Words: Life Risk; Social Security; National Risk; National Security; Optimal Policy.

JEL Classification: E61, E66, H21, H55, H56.

No.1804 Akira Yakita : Economic development and long-term care provision by families, markets and the state (January 2019)

[Abstract] In earlier stages of economic development, women mainly provide family elderly care. With economic development, progress by women in the work force has lowered the care level. If it falls below the minimum care level for elderly parents, then children might enter into insurance contracts and even demand provision of long-term elderly care by the state. Such a change in elderly care providers is consistent with predictions that have been made in the literature. However, this paper presents the conjecture that, as wage rates rise further, children will provide sufficient elderly care to parents by purchasing market care services.

Keywords: altruistic children, economic development, informal elderly care, long-term care policy, market elderly care

JEL Classification: D13, D91, H55, O17

No.1805 Akira Yakita : Is tightening immigration policy good for workers in the receiving economy? (March 2019)

[Abstract] Long-term effects of tightening immigration policy on native workers of the receiving country are analyzed in a small open overlapping generations model. Such a policy is intended to protect native workers from losing income and possibly jobs. Results demonstrate that a severer policy raises the unskilled wage rate as expected, but it lowers the skilled wage rate only if skilled and unskilled labor are strongly (technically) complementary. Such a policy also lowers the average education level of the country. If skilled labor and unskilled labor are sufficiently complementary, then the policy might instead increase immigration inflows to the country.

Keywords: education, immigration policy, skilled–unskilled labor complementarity

JEL Classification: D15, F22, F66, O24

**No.1806 Yasuko Hinoki, Junya Masuda, Manami Ogura, and Kazuaki Okamura :
Convergence of Spatial Wage Disparities: The Case of Japan (March 2019)**

[Abstract] This study investigates the wage affects adjacent areas each other. We estimate the panel model including spatial elements such as adjacent effect, reciprocal of distance, and GDP. We predict the effect of innovation giving wage increase in a certain region by the impulse response as its application. It will be decided depending on the economic scale of the region how the wage rise in the region affects other regions.

The important finding of our analysis is that the wage in population concentration area does not spread to other local areas although the wage in the local area spread to other areas. As a result, the effects of region-specific wage shock on aggregate wage level is larger in local areas than in population concentration area.

3. 2018年度決算および2019年度予算

研究所（上段）およびそのうちの研究プロジェクト（下段）の2018年度予算・決算および2019年度予算は以下のとおりである。

2018年度予算・決算および2019年度予算

(単位：円)

科 目	2018年度		2019年度
	予 算	決 算	予 算
消 耗 品 費	350,448	341,529	302,520
旅 費 交 通 費	2,707,000	2,177,426	1,439,080
通 信 運 搬 費	112,320	88,609	112,141
図 書 資 料 費	182,000	176,689	234,000
支 払 報 酬 費	1,520,000	650,480	680,000
印 刷 製 本 費	2,365,280	2,359,564	2,693,280
賃 借 料	11,280	0	11,280
修 繕 費	100,000	62,197	0
会 議 費	378,000	378,000	85,000
ソ フ ト 費	54,000	0	10,000
機 器 備 品 費	0	0	0
保 守 諸 費	0	0	0
そ の 他 調 整	0	0	2,000,000
合 計	7,780,328	6,234,494	7,567,301

内 研究プロジェクト分 2018年度予算・決算及び2019年度予算

(単位：円)

科 目	2018年度		2019年度
	予 算	決 算	予 算
消 耗 品 費	0	0	0
旅 費 交 通 費	2,032,000	1,907,062	1,004,000
会 議 費	178,000	178,000	0
図 書 費	172,000	172,000	72,000
通 信 運 搬 費	0	0	0
そ の 他 調 整	0	0	0
合 計	2,382,000	2,257,062	1,076,000

4. 2019 年度活動計画

2019 年度は、全学附置化して初めての予算編成であるため、前年度までと比較して大幅に予算の変更を行っている。今までは経済学部の一部門として位置づけられていたため、様々なものが経済学部の支出とあわせて行われた。例えば現在の経済研究所の HP は経済学部の HP の一部門として存在しており、これを分離する必要がある。このように大学附置化に伴う様々な費用が必要になる。

新規に計上する項目として、事業費としてセミナーの経費を計上している。これは経済研究所の活動として、内外の研究者との交流のみならず、地域における経済学の研究拠点として、研究所の事業として学外の研究者を招いてセミナーを行う。

これらセミナーは近隣研究者・大学院生等にも開放し、東海地区の経済学の研究水準向上や研究者育成を目指している。

また、英語雑誌の費目を計上した。研究に不可欠なジャーナル類の購入費用が全学的に不足しており、研究所に関連する研究を行う上で不足しつつある。それを補うためにこの費目を計上している。また、経済研究所の HP を経済学部と分離するために HP の保守費を増額している。

5. 研究所研究員・特任研究員の動向

経済研究所は2018年度に経済学部附置から大学附置に移行した。それに伴い、経済学部中心の仕組みではなく、経済学に関連する広い人材を集め、経済学の発展を理念として運営する予定である。現在の研究所の主要活動は主としてプロジェクト活動を中心に行っている。現在9プロジェクトが進行している。特任研究員新規募集49名。佐藤茂春氏が新規研究員に加わられた。

6. スタッフ紹介

所 長 小林 毅

研究員 (五十音順) 阿部英樹 内田俊博 大森達也 釜田公良 梅村清英
 近藤健児 佐藤茂春 白井正敏 鈴木崇児* 椿 建也
 都丸善央* 中山恵子 平澤 誠* 古川章好 古川雄一*
 増田淳矢* 山田光男 吉野裕介 (*は研究所運営委員)

監査委員 柿元純男 白井正敏

特任研究員 (五十音順) 朝日幸代 (三重大学) 畔津憲司 (北九州市立大学)
 石川良文 (南山大学) 板谷和也 (流通経済大学)
 稲垣一之 (名古屋市立大学) 稲葉和夫 (立命館大学)
 内田 晋 (茨城大学) 大川隆夫 (立命館大学)
 大川昌幸 (立命館大学) 岡村 誠 (学習院大学)
 小川 健 (専修大学) 小椋真奈美 (追手門学院大学)
 尾崎タイヨ (京都学園大学名誉教授) 尾田 基 (東北学院大学)
 兼本雅章 (共愛学園前橋国際大学) 川端 康 (名古屋市立大学)
 菊地映輝 (東京工業大学) 工藤郁子 (マカイラ株式会社)
 倉田 洋 (東北学院大学) Ngo Van Long (Mcgill University)
 櫻井一宏 (立正大学) 佐藤 隆 (下関市立大学)
 渋澤博幸 (豊橋技術科学大学) 須賀宣仁 (北海道大学大学院)
 杉田洋一 (一橋大学) 鈴木伸枝 (駒沢大学)
 鈴木雅勝 (城西大学) 寶多康弘 (南山大学)
 竹内信仁 (愛知学院大学) 多和田眞 (愛知学院大学)
 西田亮介 (東京工業大学) 根本二郎 (名古屋大学)
 英 邦広 (関西大学) 原木万紀子 (立命館大学)
 Binh Tran-Nam (ニュー・サウス・ウェールズ大学) 藤川清史 (名古屋大学大学院)
 二神律子 (中部学院大学) 古松紀子 (岡山大学大学院)
 本領崇一 (University of Mannheim) 松原 聖 (日本大学)
 松本昭夫 (中央大学) 水谷研治 (名古屋大学)
 森川浩一郎 (近畿大学) 焼田 党 (南山大学)
 柳原光芳 (名古屋大学大学院) 柳瀬明彦 (名古屋大学大学院)
 矢野 誠 (独立行政法人経済研究所) 藪内繁己 (愛知大学)
 山田誠治 (神戸大学大学院)

研究所職員

櫻井 泉

〈 編集後記 〉

2018年度も、プロジェクト研究、セミナーの開催、研究叢書とディスカッション・ペーパーの発行など、多くの分野で活発な活動を行うことができました。研究院・特任研究員の先生方ならびに各種セミナーでご協力いただいた方々にお礼申し上げます。またこの場を借りて、献身的な仕事で研究所の運営を支えている職員の櫻井さんに感謝の意を表します。

2019年度も引き続き活発な活動を予定しております。学外の方の参加もお待ちしております。

(運営委員 鈴木崇児)

お問い合わせおよびご連絡は以下までお願い致します。

中京大学経済学部附属経済研究所

〒466-8666 名古屋市昭和区八事本町 101-2

Tel : (052) 835-7111

Fax : (052) 835-7187

E-mail : cuie@ml.chukyo-u.ac.jp

Home Page : <https://econo.chukyo-u.ac.jp/instituteEconomics/>